やおねずみ

中村俊定文庫
文庫 18
305

落颿序

嗟乎夫俳之正風竟墮
再作於蕉翁閲雖正履
而邪道興於是蕉之十
謫仙及貞享式正辭微
而指傳於世以濁手

彼美皆由首歲千茲為
自隱湖南而後能天年
至八音韻者誰也省夷
嵐之子二子之徒嘉遂
諸國大老侍國君小老
及於豪武與語而不見去

又降而鸞甚門之名遠
互押茶於一時最六之
下者也子追甚翁澳老
肉味三月在武陵集此
地郎也者居角門與沽
德門守洪笑調劉曰之

變化媚文肯哉至于今
旬之體哉若翁之遺風
生生分上會友為張以
屬離以繼來鄙什而為
蒐羅一冊而已

寬延二龍輯屠維
大荒落季春中八
浮白書騰白音

留別

無由乃用河わたる東に
遊んと顔館子師半
り春の色秋の暮に
近くは世の中に浪の遠は
月に浪のゆくと私
那うし

山月浪海ちよ流る色

桃宗

嵯峨の
白音

中村俊定文庫

臚語

遅速任到来
各前書略

鈴ゝ舟に添ん柳乃一條　春平

日和哉阿房にも富士筑波　留丘

世の中に言の葉草や花と酒　盾山

風呂しきの錦を出るも乃江戸　丁丶

笠の塵以て出るやにさく桜　念西

咲も嵐もはしめ梅の宿　琴峰

笑ハ手に添ゆる甚雨哉　志連

永き日を玉章書に揺へ雲有也　白理

鶯の笑子数ゆる旅路哉　柳橋

有明に少し北筑波の道に寝　知格

むかし野く草も麗ゝや春の丸　山螺

世へ白ふ白き椿さへ白し哉　梅五

肩さく風切や東乃梅の月　其白

種子おすもとの月見さゝ菜草草　弥甲

花乃道千里も講しつるき哉　耳順

餞別

弱らめて下川抽気春の山　不左

此旅立ち日のはし白し哉　魚波

抱年も東乃旅や鶯ころも　富岡 登雨
綱碇ゆるく春暮鷗かな、雪波
花ま鳥の蔦しハ乃何事ぞ、李圭
風も春富士を浚はん旅硯　苑馬
永宮のはすゝ紐まゐる柳の雨　日和佐 文随
船橋も若菜子浮や飯胡　阿部 鳳山
松島の茶へも雨けうる霞路　花養一
遊びし亀日和なる筆清書　竹志
竹先茶眼ハ重し花乃人　西潭

鶯も枯晴つる太ま入日かな　古竹庵

鐵牙

引鴨の霞ふくらまし武蔵山　浪花 白羽

見てみ神子の春風や安房の海　浪花 富天
明けりや花ゆる城しな中節り　室風
又近水も臘の狩る枝の邦　鴻凡
忘れなよ故郷へ富士の花こゝかし　素文
筆ふ沢る江戸生気や出かけ旅　嘯月
好み遊ぶ日の花篭る別れ哉　呂廿
日も暮れん東かへるけのもの旅　雪彦
吹きの春や風呂ありん花の人　千渓
降まつや雪ちるぬくし桜旅　梅室
着く日の袖よ上なちゝちもの浪　雪川

住吉社參

墨よしや物の書はき春の海　白喜

伏見止宿

聖も旅ゝ我紀の御[illegible]の達者なれ

内外乃御神を遙拝して

雑子乃聲も人よ言ふ寒かな

宮

廟乃後ろ子[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]梨子[illegible]

宮乃驛にて俤白句も
長途の憂も忘るる深情也
原より望めハ美女宮の峰
頂に雲を捧て群書遊覧も
船に遊ふに四方乃勝も
うち晴て絵よりとく似逢
て晝のやうな眺望は思ひをとゝ
徒より帰る睦の婦を終
細き生業て親の身も
新年しく気に徳を思ふなる

鄙珠紀行のこ

雨晴見や謡聲うつ月日の竹生嶋
三嶋晴嶺富士

廣士へ向ひ顔笑ふや浅間姫
大楼よりこ石
桜まうち落ちて石をも飛ぶ深し

三月堂武塚神田鍛冶町より
行戻り道之の長くて嘉
許くを絵に出せよ有
為失之の氷もちかくく
解ぬうち流されし

六ッの程ふ汐みちせしあかし江戸の空
豪州澤和尚ハ廣澤先生系
古蹟の友ゟ歳ふ此霊場の勝を
讃嘆しおふ多く人々や
俳のあとふ先生紀念書残さ
閣ふるた月来の思ひを尽し
湖州乃静ふ傍ゟ紀おくる所
あたへさる梢も揺ふて　柳ハ乃与

三斛庵の佳人ハ誹の上風
斜ならず去年光冒し
さへしく
梅さま咲風乃柳さ去の名か
味乃露了月をも吹け　蝶

栖居

本復ありし悦を拾ふる梢ふ新　今

半時庵より書贈りて遣
はさる病を起て誹情すく
那とて左の一句越贈りて
節々四季乃章を延ま
ゑみ出たり之を記す

春

涼しさも暖さもまたや初暦　白音

夏

水草に人も隠るゝ暑さかな

秋

あふのきて見る川も何の雲(?)

冬

下葉哉拂直身の初時雨(?)

歌仙

蓬莱の飾りは川の迷ひ梵(?)　皓々

日永越参る門の鶯　白音

霞みくも借せて柱の若菜摘(?)　東武　摟川

一室に雀の湯やなほわ(?)　永我

其枝も身よるみ捷まて(?)　竹郎

秋くりし松乃都しき(?)　波捋

蚪菓子何かゆのあら梅花音　白音
都りの秋の暮ともしらぬ　皓々
隠れ家の盒あかるし門に梅　永我
頁犬二疋老子多し、のまゆ　竹郎
大名若衆然きても添ぶ新き　波採
蒲團中くゞりて見かる尾炭　永我
憶て来る草立乃鋸へ刃下来　皓々
許可ましゝて折數奴官織　白音
秋たちての味噌豆さ乃綴鶴乳　竹郎
月了足のは蟻乃ゑんされ　波採

阿羅漢の打撲子続て花の峰　永我
ちんともいりけ桔梗咲ちか利　皓、
白鷺乃上手にとある睡抗　波採
乞食若衆血まみれよ多り　竹郎
始まくし器庫の所を歌乃ゐ經　白音
十二一束數拜むらし　嵎(?)　永我
類冊を判れ形と長法年へ縫乃毛　竹郎
斯いふ殊をふ今小溺る姫　波採
強乃やうにたち洋の揮るたて洋の　皓、
不斷生て居る米搗乃臑　白音

蝶掃の乱るゝや狗ふらん　永我
武衆八宗仏四位乃少将　皓、
風の月倖中く節の騎も　白音
柳のく誰し家ま妙れて　竹郎
紅葉を見宮の赤さを見く鍵て　波拶
東山らぞ見る卯し然　永我
艸朧より毛錦合羽で寿りそん　竹郎
加ら本立て花売も来ル　白音
芝清羽餅橋时も花乃寿　皓、
百七十里うく乳すれ女　執筆

名さ至ゝ了不旦あり也我ー新ふ名を
嬉ニ東の見ハ久しく流ゝ貌子名
何りとゝくもせ寿や和でむ治し
根ま扶実て、赤きを行ふいちや一
盃の佐よ百年の御ほ哉赤ふ
るおゝのし

東武
西武

叶ー衣恋ゝして兆ゝ雨サく梅　白音
箕舞らゝ涜北の万久ゝら新らし　、
鼓を礒了出盆売の座鞁了市　武
殆北の通ゝ胸て毛り生へ　、
山宝への丹若ふ西て舟二艘　筆
已まぞる蝉啼し膘

烽乃烟霞の間への踏き込こ
京判の出きくろぬ事なりし
鳳凰乃来れるとも留まる能
旦暮乃晴れくもりて心
千景の中にもうち思ひまゐ
松の露ふく人みれとも雨
拝みけし手の跡も数不の月
まうち於る無下早る形やう
雨続き日ろに雲は峰なり
侍らと紫数芸乃綿への絶

音武音武音武音武

三乃窓も涼しいり独への音き蔵
むすんて敵く帯も花への代
薄くとも幸ある人の白月代
土気も於れ而饒き光悦
備夢るに花の更れ笑って出
又絶あまる於ろろ七夕
落月夜銀乃酒ふ人たのれ
橋の香清す取葉餘ちる
過る氷少し踏う傘ふ来れ
呼く陰のちいさあつすや

音武、音武音武音

廿日獨箕の輪乃縁者若
白雲萬里木魚赤捨
脩天に向ひてもの以ふ常心や
杉よりの雨の笑ひたふ刹
新とおへんと聞て売ハ飛てり
折々の紙鳶ハ高以結ん
怖しや運にとは影てさハ病
諷せてたる窖乃中
二ツ三ツ嘘の出る葉の菊ま
百千の名も人を須る華果

武音武音、武音武音筆

百韻之首尾

毛種乳色常も雛の下種哉　東武　存義
葉とのえをし蝿子乃枕　白音
蚕時去年乃機物識出来て　東武　平砂
安の九山哉何として降ふ　、律山
清入新の風子の心端は草せ原　、二調
小刀ゝ郎治せ色よ高純揀　、隣笑

月の秋ハ二歩主を遣ふて勝て色　、露月
正直てあるか阿川麦　、木我
子をあ為給ふし月影の鶴乃巣　、盛泉
常に佛乃めすらん　、宁元
狼も隠れて狩る花嫁鶉乃巣　、芫之
鶯驚ゆかりさらハ初雪乃空　、竹我
業平ハ分茂程ふあら孫と毎　、花永
はらふ拝ハせし丹子髪乃稽　、羅仙
松を敷く神も浮世の花心　、永我
玉垣の光も数三月あ色　、筆

歌心

時鳥聞く深し三ツ谷笠　永我
旅乃猿ハ主もて知るやら　白音
梅を見門の方よりも萌し天
何のみも遠ざく旅の峰乃峰　永我
誰を留数ハ亭と何もの月　、
洗かるみ年てもし雪の乃下　音

雪便へ猿も迎ふ義太の手紙　音
ちけえ紅葉も蒲京乃諱　我
木男の茶くさ道から大般若　音
竹生キ起して恋の関守　我
夕暮ニ鱉を港すし兆乃こ　彦
あやきの世さへ盤渉りく　家
酒肥り涼さ月ニ君々の子姫　音
言えならめや双六は寒　我
尼ノ手ハ印刀入れ紀おけわか　音
花佗へ志るくも応の氏神　我

二

花雲乃朝乃露我得衣ハ揚　青
海苔さ者え海苔苦まり　我
風巾　山我出れて乃須ゆる　、
お玉猪許の毛光輝き　音
老ぬれと煙る麦の気はく者　我
描ハ秋わの絲唯ふ危とな　音
蛉原我牛中分ニ月乳底　家
唯子子ハ身ハ色む馬こハ擲　彦
針鋼ニ打子さい両乃猫一ツ　我
喜うつの八年木ちゆる哉　彦

納豆と鷹ハ兎角ものやま　我
柏子の毛衣旅乃居粒　音
六月ノ端を張しけむハ錦　我
百日切乃法華はまかし　音
ウ
柳原ハ浮世の花の宿かし　、
すゝわたの拂てたゝるゝ入舞　我
男えん恋大工手於かさる文廻し　音
世上静ゝ葉六子の跡　我
娘の中道春を新乃音耳　音
峠越れ気天下皆春　筆

歌仙

照月やおもしろ人の同たのハし　東武　羊仲
露ちるもおはけ韻の通ひ路　白音
もろこしの中へ寒山子の寝嘱て　東武　買明
跡て寛ハ孔好て気をわかれ　、湖十
元船を云と絶けくの身ひとつや　、再賀
干鰯投遣ハ酔としつ川　、永我

蘆ゆれし根乃浮島の葭柳　渭北
白粉うつりも出入せず　芝明
赤坂で近き武士の名を隠し　白音
帆もおろしや二十八増　米仲
夕ぐれの月崩に陰れて荒蝕　永我
東てきれ輪に安否託曲　再賀
秋風の粉粉されて面白や　芝明
ゑのしも商売卑しも商売　渭北
盗人の罪乃先から鳥羽玉乃　米仲
初電姫のなきし消へのる　永我

香もたる秘織の花の延機　再賀
芹と山葵乃中ぞ流るゝ　白音
傘て出る日帰る見れ猿心　永我
御用懺し紺乃だ以前し　米仲
まあ先へ呑む素娘の酒の酔　渭北
小見川村で志乃ふ狐云　再賀
投入乃北へ傾く蝉ぼ菊　芝明
神垂の目のさゝめき賽銭　永我
番近き天窓へ油一注つゝ　白音
樹ゝ路の松て富士妙の香　渭北

歎打先ツ出縮めく里合　再奘

四十まて見れハ待も無事有月　芝明

家萩の露ちる外ハ何もなし　米仲

障子乃佛の引すゆる障れ　再賀

ツ猿若同志よかハ尾をふりて　永我

森蔭へくさ飲習ふ酒　白音

定紋も泣くみ見れハ無瀬　芝明

屋根ハ三百六十萬楊ふる之　米仲

捨より捨て菜ち蓋ふ谷絵の旁　渭北

苗代まくし駱驚の糸張　筆

歌仙

猪乃足ゆくや雪水下清水　東武　渭北

炭竈上徐ふ風のうへ引く雲　白音

雑魚花散の先へ夕暮矣　、

鉄炮袖ハ神乃由ち利　北

猿の髪月み帆けて行　、

秋も三度の節とはらん　音

ウ

三絆乃音も聖分けれ八ん
一首て治乃八束今井宇陀
川手猪艸乳房の皺ときわるに
鋒巻斗踏る露やみ
神楓と成りてめでる紀志机

下畧

遊品川海晏禅林

青海志懐廣し若楓

到芝泉岳精舎

四十七空るも噂よもちりきくれ

詣禮龜井戸天神

青梅や吹く川音てとも　同
跡

卯月廿八日故園を思ひ
東武乃人〳〵に別侍る

蕣や世を見たてかゝる露を持

貫至ハ王道まで送りて
瀟湘の法の辨ハ関越まで
嫁にあまた送りて実盛こ
作東門ハ此行ほと
あらそひし起手を争ふ
風雅の一點ハ雨まさしと
おもひやるまて此暮
まかせけり

柚の花ふくはそらや遠ざかり　くろかみの逸　皓二

毒の音や宍粟路よハ瀟々し

管楓

古埒へ夜寒をかゝるきはの森　湖十
おもき釈子の結門なし　竹郎
若く見舞ゆゑをさまる楓　芝明
藍乃紫同しも恥し杜丹　東和
白雲の上にも音はなし舞雲雀　貞玉
誰もふる舞の角も桜の下　牛醒
花見て生残らぬ登り坂　渭北

四季混雑　寂子捨

春やこのわか竹も手植る園　盤谷

今朝秋も神の住りてまつりけり　存義

銅乃山おき志ほわて番葉かな　平砂

桃咲や繻子の表に繻子の牛　米仲

迷ひ子を呼ふ聲寒く蛙かな　買明

石女乃仕遊し哉や寝子の月　祇丞

象潟男や牛に狐の酒機嫌　再賀

松嶋へ赴く人を送る

嬉しからん松乃花見ん塩の浦　黒露

暁を招くて帰る月見かな　午寂

華あまたや隣乃緒やむしな　宗瑞

月花父世を浦さ節一　金乃脉　佳風子

哀恋な人を泣くや鹿の声　玉泊子

あれのやと松茂の国恥ほとゝぎす　五霽子

口切や　帷内義も小ましき紀　春来

酒もらひん安さよ小春時雨　吏登

葉もとあるもの　佛の影の債之　貞山

山吹乃花残りも果けり　貞雨

営ぞ見まして海ちかし 杳歩
足しらにむすまれまのつ 云ゑ登り
早苗とる歌も止むわほかしなるに
卯花もや松の関手垣稲に
峰風の吹塩梅ヲて夏たる弥
旅人にハ毛ろきくもやきてしのも
法ゑより先へ流水の柳かけ
菊あるて挑すハ酒の手柄に

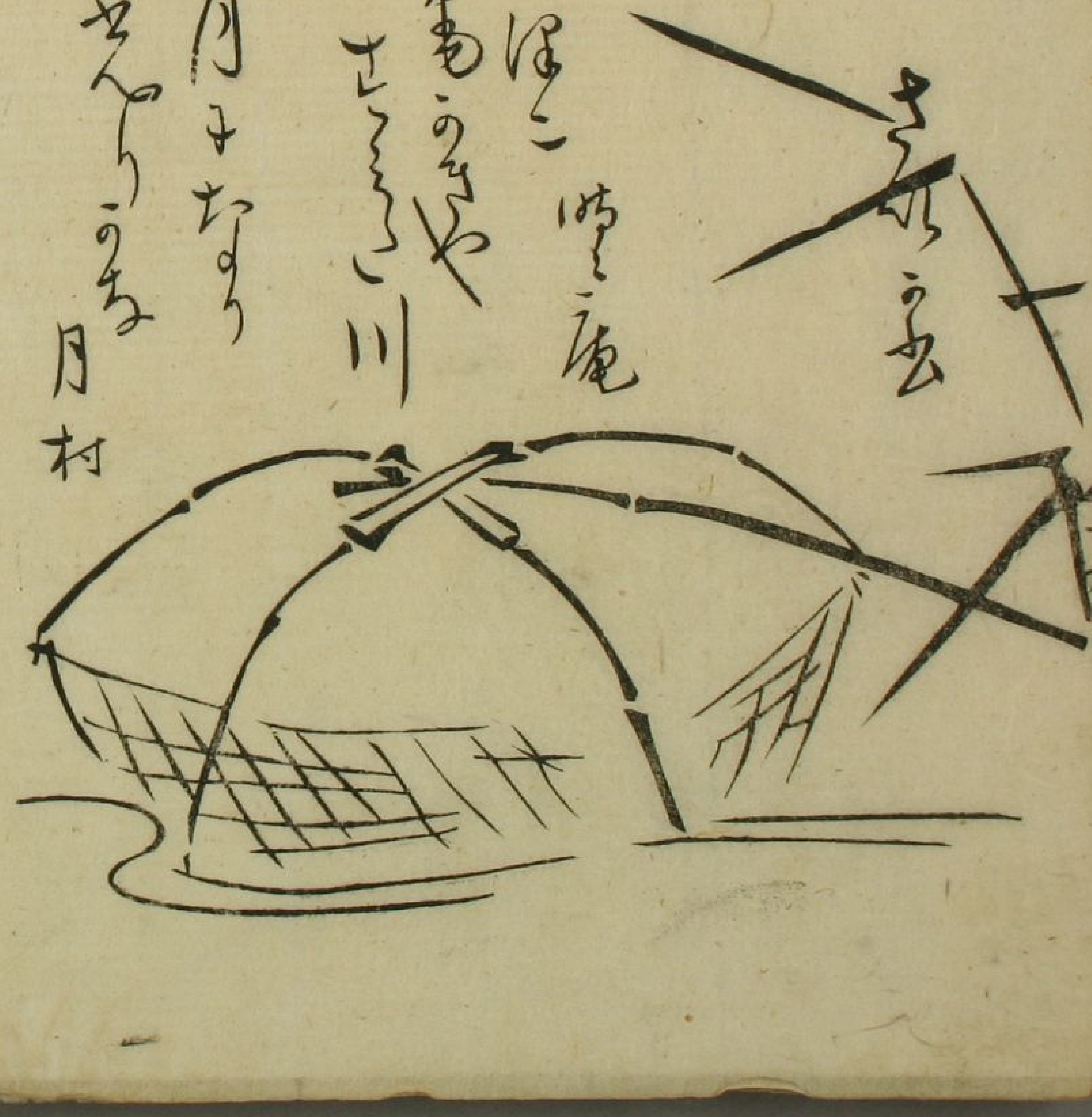
卯月廿九日鎌倉露尾

八幡宮法楽

栢莚
訥子
春水
仙魚
帯江
紅朝
梅幸
蛙井

まつ杉陰に一亀のぞきや さゝれ川　蝶庵

花緑月になり 蛸せんりの夢　月村



紅の蓮や本来の土て染し法の葉

定家卿や小指を切て血乃経

太祖の述作にて妙字常不

軽書看経ても信を帰さ

法不軽も併我卸就致に

読誦是西施乃眉を志

の盛出小水を写しの

都輪御紀

藤澤寺

百八號水晶釣ん藤葉

晴立法を立る染ぬ二千

風法華二十八品の書写あり

即乃比妙典我書写して深

一品ゝゝ子句あり是を父母の

石塔丁納む

如清涼池心の蓮乃浮葉かな

宗長居士立声をしかれた

回向をしく人彭也をいまく

忘難し

絹来て開きや三川の昔の毛

見ぬ浜松の写しく朝鮮の
秋上馬を田家にて写
早乙女ら笑ふ船頭の鼻　乳兄
名古屋ハ朝鮮宿人の泊
とゝあらまし一ツまへハ知れず
今夜ハ萩原の荒れたる宿
取り夢なく鶏鳴きうつに
おこしといふ子なをを出すに宿人
乃行処をたつんと小屋ちと掛ヶ
雪ちれぬ箱ちらし　芳[?]

昔をいつれ芭蕉も五十年あまり
篇[?]楽り[?]只今
たゝ小終来遊びけるを
麦[?]や仲仙道乃　[?]　候
五月九日京本屋町に旅宿
十日北野まて参詣去年詣て
此しも[?]洪蔵又[?]
何[?]みも重[?]道の[?]ハ流[?]めるを
こほれて句ふ花[?]の花と
いへる神[?]を[?]出[?]

雨雲に包む橋の深雪

十一日御射山霜に訪ふ家

仙洲庵の定宗宗小置

松子来て通して志るに夕霧

二夜の明るは夢乃の跡

一峰を峯中のあるべと云ひかけて

尾は洗ふ時もし鯉

松茸出て山へ遠くし背比月

奉公人も見はる秋風

下略

白音
百丈
羅人
五始
笙和
執筆

淀川

川舟に柳を舞やる五月雨　白音

あんしの枝をひた月もなく

勝手知りて通ふ人へ申遣

拾ひ初し蛍の所の桜の実　泰耕

正月の孫藤よて弥生

起さるる麦のけて転ぶ

家洗乃ほ雪は故ひなそ

ゆるめ歌人あれはむさし

根を以て次を休め花咲く